

稱讚 二六三号

二〇二四年十一月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇二四年度 稱讚寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

じりきしよぜん
自力諸善のひとはみな

ぶつち ふしぎ
仏智の不思議をうたがへば

じごうじとく どうり
自業自得の道理にて

しっぽう いく
七宝の獄にぞいりにける

『正像末和讚 誠疑讚』

「公正世界観」ってご存じでしょうか。
「公正世界観」とは、人はその行ないにふさわしい成果をこの世界では与えられるものであるとの信念であり、よい行ないをする者は報われ、悪い行ないをする者には罰がくだると素朴に考える信念のことである。「責任帰属に及ぼす道德基盤と公正世界信念の影響 北村英哉氏著より」と言われております。

コロナ禍のとき、コロナに罹るのは、「罹る本人が悪い」という自己責任・自業自得と考える人が、世界中で日本人が一番多く十一%程いました。他国



9月にいっぱいになって採ってもらい、数個残っていた柿が今も枝にぶらさがってます

ではせいぜい一〜二%でありました。これは、世の中は公正でなければならぬとの理想に、仏教の

考え方と思われる「善因果果」「悪因果果」「因果応報」の思想が一因しているからだとも言われております。

「自業自得」は自分自身に向けるのは自分を鼓舞するうえでは良いこともあります。他に向けると、被害者をも非難し、差別を生むものともなります。それで、「公正世界観」は「公正世界誤謬」とも言われこともあります。

日本テラワダ仏教協会では「複雑な因縁の絡まり合いである現象に対する反応がすなわち自業であって、その自業が次の自分をつくっていく(自得)という意味で、自業自得です。現象に対する反応(感受心)の流れが輪廻であって、輪廻の見方からすれば、自業自得しか成り立たないのです。そのように厳密な心理として自業自得を認めることで、人は向上への道を歩むことができるようになります。」と解説されています。

なるほどと思うのですが、自分の現状を幸福(楽)と感じるか、不幸(苦)と感じるかは、自分の外界に対する感受の仕方次第であり、「自業自得」を認め、自ら道を歩める方ならぬことでもあります。

親鸞聖人のお言葉に「心(しん)を弘誓(くげい)の仏地(ぶつじ)に樹(た)て、情(こころ)を難思(なんじ)の法海(ほうかい)に流(なが)す」(『浄土文類聚鈔』)とあります。(編集後記 愚案に続く)

築地本願寺 報恩講のご案内

このたびは、ようこそ築地本願寺の「報恩講法要」にご参拝くださいました。

本年、二〇二四(令和六)年は、築地本願寺の「親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」を、去る四月二十六日から二十九日までの四日間亘ってお勤めさせていただきました。

東京教区内寺院ご住職さまをはじめ、僧侶及び門信徒の皆さま、さらには有縁の多くの皆さま方のお力添えにより、五十年に一度の大法要を、無事円成することができました。

改めて衷心より厚く御礼申し上げます。

宗祖親鸞聖人が、九十年のご生涯をかけて顕らかにされたお念仏のみ教えを、私たちは間違いなく次の世代へ伝えていかなければなりません。そして、五十年後にも、御同朋御同行のお念仏の輪が広がる中で、再びご勝縁に遇えることができますよう切に願っています。

近年、世界各地においては、深刻な気候変動に伴う災害によって、自然破壊が進行しています。また、起つてはならない悲惨な戦争により、多くの尊い命が失われています。これらのことは、ものごとを自己中心的に捉え、思い通りにしたいという、人間の欲望の深さに起因するものと存じます。

翻つて、親鸞聖人が生き抜かれた時代を見ましても、天災地変や人びとの争いなど不安の尽きない末法の世でありました。聖人は、そのような時代にあつて、あらゆる人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすくお伝えになり、「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」と願われました。今後とも、私たちは、お念仏の尊き、有り難きを大切にしながら、浄土真宗のみ教えをお伝えすることが、世の中の平穩に寄与することになると思っております。

本年も皆さまと共に、築地本願寺の「報恩講法要」をお迎えできましたことを、心よりうれしく思っております。

築地本願寺宗務長 中尾 史峯氏
(二〇二四年築地本願寺 報恩講しおりより)

〈日程〉

十一日(月)

一四〇〇 速夜法要 奉讃大師作法第一種
宗務長あいさつ
功労者表彰式
速夜布教 米田 順昭師
帰敬式

十二日(火)

一六〇〇 「御絵伝」絵解き布教 川茂 唯順師
一七〇〇 初夜勤行 正信偈 行譜 六首引
初夜布教 大中 真慶師

十三日(水)

一〇〇〇 日中法要 観無量寿経作法
日中布教 米田 順昭師
一二四五 パイプオルガン演奏
一三二〇 堂内布教 佐々木 了俊師
一四〇〇 速夜法要 宗祖讃仰作法音楽法要
速夜布教 米田 順昭師
帰敬式

十四日(木)

一六〇〇 「御絵伝」絵解き布教 千田 匡真師
一七〇〇 初夜勤行 正信偈 行譜 六首引
初夜布教 稲葉 空土師

十五日(金)

一〇〇〇 日中法要 宗祖讃仰作法
日中布教 武田 晋師
一二三〇 堂内布教 澤田 唯師
東京教区仏教婦人会連盟団体参拝
会長挨拶

十六日(土)

六三三〇 晨朝勤行 礼讃日没偈
六三三〇 晨朝布教 米井 順昭師
九〇〇〇 御示談 相馬 一意師

十七日(日)

九〇〇〇 御示談 相馬 一意師

十四日(木)

一四〇〇 速夜法要 新制御本典作法第一種

献灯献華献香

速夜布教 武田 晋師

帰敬式

一六〇〇 「御絵伝」絵解き布教 遠山 泰範師

一七〇〇 初夜勤行 正信偈 行譜 六首引

初夜布教 菅原 智之師

十五日(金)

六三〇 晨朝勤行 礼讚後夜偈

晨朝布教 武田 晋師

九〇〇 御示談 相馬 一意師

一〇〇〇 日中法要 二門偈作法

日中布教 武田 晋師

一三二〇 堂内布教 田原 哲師

一四〇〇 大速夜法要 広文類作法

御俗姓拝読

御親教(専如)門主

帰敬式

一八〇〇 初夜勤行 正信偈 行譜 六首引

二〇三〇 通夜布教 開会式

御伝鈔拝読

五・四〇 通夜布教 閉会式

十六日(土)

六三〇 晨朝勤行 正信偈 行譜(五十六億)

晨朝布教 武田 晋師

九二〇 布教 武田 晋師

一〇〇〇 御満座法要 報恩講作法

宗務長挨拶

帰敬式

〈住職の予定〉

十五日(金) 一四〇〇 大速夜法要に出仕

一三三〇〇〜一三三〇四〇

通夜布教四席目

場所: 閻法ホール

〈団体参拝〉

十一日(月)〜十六日(土)の期間中、ご都合のつく日時にご参拝頂けるのですが、稱讚寺として団体参拝のご法要を左記の通り指定させていただきます。

日 時

十五日(金) 一四〇〇 大速夜法要

集合時間 一二:五〇

集合場所 本堂正面階段下辺り

※住職の姉がお待ちしております。

お揃いのところで受付を済ませ、お齋弁当会場に移動します。

お食事が終わりましたら、本堂に移動します。席を確認して法要が始まるまで、ご自由になしてください。

※お齋弁当は予約制です。要の方は、事前に住職にお申し出ください。お一人三千元以上となります。

※お齋弁当不要の方は、十三時三十分、本堂正面階段下辺りでお待ちください。住職の

姉がお迎えに参ります。

〈団体参拝お申し込み方法〉

十一月十一日までに住職携帯(〇八〇-三四九三-四一七二)にお電話ください。

〈布教使紹介〉

十一日速夜〜十三日速夜

米田 順昭師

広島県廿日市市 最禅寺

本願寺派布教使・学階 輔教

十四日晨朝〜十六日日中

武田 晋師

山口県萩市 光山寺

本願寺派布教使・学階司教

龍谷大学教授

※この度は、境内で、能登半島地震被災への支援の一環として、十五日〜十六日の二日間、「被災地物産店」が開催されております。

※帰敬式をお受けの方は、住職にお問い合わせください。

※お車でのご来場は、遠慮ください。

※稱讚寺の報恩講は、十二月二十二日(日)です。あらためてご案内申し上げます。

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

二 身心柔軟

本文『大本』にのたまはく、たとひわれ仏をえたらんに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、わが光明をかふりて、その身にふるもの、身心柔軟にして人天に超過せん。もししからずば正覚をとらじ、と。

口語訳 『大経』に言う。われ仏とならば、十方の量りなき世界の群生、わが照らす光明がその身に触れば、身も心も柔軟なること人天に超えるものとならしめよう。しからずば正覚の身とはなるまい。

一 これは『無量寿経』に説かれた四十八願の第三十三の願である。「大本」というのは『無量寿経』のことである。阿弥陀仏(無量寿仏)の浄土を説く經典のうち、とくにひろくその本願を説いてあるので『大無量寿経』といひ、略して大経とも大本ともいふのである。「たとひわれ仏をえたらんに」とは、阿弥陀仏が法蔵菩薩となりて衆生を攝取して仏とならうと願われるのである。

「十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類」というのは、十方衆生のことである。十方に無量不可思議の世界がある。それらの世界にはそれらの世界のあるべき道を説く仏がある。それで十方衆生の

あるところを諸仏の世界と呼ぶのである。その衆生にたいして「わが光明を蒙りて、その身に触るもの、身心柔軟にして人天に超過せん」と願をかけた。身心の柔軟であることは、人間の健全なる状態として最も望ましいものである。しかるにそれが頑なになり固くなりがちである。そのために悪をも犯し不幸にもなるのである。如来はこれを悲しみこの願を立てた。まいた。しかれば「人天に超過せん」ということは世に希なるものというところである。「人天」と言っても広い意味において人間のことである。人中において果報の勝れたものを天という。その果報すぐれたものは、果報の劣るものよりも身心柔軟であることができるように思われる。されどそれは表面だけで、内心はかえって頑固であるかもしれない。その頑固さを解く大いなる光がなくては、人天みな真に身心柔軟であることができないのである。それで如来はこの願を起した。まいて「もししからずば正覚をとらじ」と誓われた。衆生を身心柔軟にせねば仏とはならぬとの誓いである。願には必ず誓いが伴わねばならない。誓いなき願は、ただ希望である。願いなき誓いは、破棄されるまもしらない。誓いありて願は力を具え、願ありて誓いは堅固となるのである。

二

二(一)で第一に留意すべきことは、如来の本願は十方衆生にかけられてあることである。衆生とは群萌であり、庶民であり、凡夫であり、煩惱を離れることのできぬ我らである。触光柔軟ということも、この衆生にかけられた願である。したがって光「そ

の身にふるもの」とは煩惱具足の身であることはいうまでもないことであろう。「光は智慧のかたちであるから、身もまた心のかたちであるにちがいはない。しかれば光を身に感ずることは、智慧を心に得ることの他ないのである。されどそれがとくに「身に蒙るもの」と言われてあるところに衆生にかけられた本願のところが頂かれるのである。

したがって我ら凡夫が身心柔軟になるということでは如来の光明に照らされて煩惱が解消されることであろう。それを『大経』には「この光に遇ふもの」と説いてある。その三垢とは欲と瞋と愚かさである。それが人間生活の垢となり、障碍となり、身心を固陋ならしめているのである。どこまでも権利を主張するものは欲のころであり、そのために争うは瞋のころである。それは畢竟自他の因縁を知らない愚かさによるものである。そこから自善他非の剛直さが生ずるのである。その自身のすがたが悲しむべきものとして光の前に見いだされる。そしてその悲しみにおいて三垢は自ら消滅し身心柔軟になるのである。

光に遇うとは、光に照らし出されたことである。それは自身の存在が悲しむべきものとして見いだされたのである。それこそ与えられた凡夫の自覚というべきものであろう。そこに踊躍歡喜とある経意が窺われる。それは闇路を照らす光に遇えるよろこびである。差別動乱の生活も一如無為の悲願に解消されてゆくよろこびである。それが踊躍歡喜とは思ひもよらない感激をあらわすものである。したがって「善心生ず」ということも、「共にこれ凡夫のみ」の自覚にあらわれるものである。それは「自然のことほりにて柔和忍辱の心も出でくべし」ということである。それはさかしく善悪を分別して

の善ではない。「善きことも悪しきことも業報にましまかせて、ひとへに本願をたのみまゐらす」ものにあらわれる善心である。宿業の生活が大悲に燃焼されて自然にめぐまれる功德である。

三

しかるに仏教一般の思案としては、柔軟心の成就は聖道として願われているようである。菩薩は諸法の一如であることを覚る。それはすなわち平等の法身に帰依して差別の衆生を慈悲することとなり、それで柔軟心が成就するのである。

したがって柔軟心は、智慧・慈悲・方便となつてあらわれる。その智慧とは我を立てないことであり、慈悲とは他を了解することであり、方便とは善処することである。思うに我を立てないことは一如の道理を帰依とするからであろう。運命の如に達すれば苦樂に惑うことなく、行為の如を究むれば善悪に執らえられないことはない。畢竟はどうなつてもよく、何をしても差支えないのである。それは自暴自棄のようであつて、まったく異なるものである。帰依を失える自暴自棄は頑なに硬化せるものである。それこそ我を立てるものといわねばならぬものであろう。平等法身に帰依する智慧は苦樂の運命にもそのところを見だし、いかなる行為にもその依るところを失わない。したがって善悪に我を立てる必要がないのである。

これによりて他を了解する慈悲があらわれる。慈悲とは衆生の在り方を尊重するところである。そこには自善他非の情は生じない。したがって他を征服して苦樂の場を争うところにはならぬであらう。そこに見いだされるものは善処の法である。それはすなわち他を書しないで行ない得る自身の道である。この善処の行によつてこそ柔軟心は成就す

るのである。

そこから柔軟心の行は普賢の徳をもつものと説かれてある。自善他非は独賢である。自他の一般化は普愚であらう。自身の分を尽くすことが他己の用に立つ、それが普賢行である。これすなわち差別の実際の上に一如の道理を現行するものである。これに依りて我はわが道を行ないつつ人びとの恩恵を感謝し、他は他の道を行なうことを見て、我がことごとくに随喜することとなる。それが普賢の徳である。

しかるに親鸞にありては、この聖道としての普賢の徳は大涅槃を証しての後のことと期待された。それは真仏弟子にめぐまれている触光柔軟とは別のもつものに思われる。といつても柔軟心に別のあろう道理はない。しかれば大涅槃を証して後にこそ無障無碍にと期待されるものが煩惱具足の現生においてめぐまれていることとなる。そこに真仏弟子のよろこびがあるのである。

四

されど柔軟心を体得せる聖賢と、柔軟心をめぐまれる凡夫とは、その心権えの相違があるのであろう。已に言うように、一如の道理を覚るものは苦樂善悪に執らえられることはない。それこそ聖賢の境地である。そこに「随処に主となる」という見識も立つことであらう。されど煩惱具足の凡夫はいかにしても苦樂善悪を離れることのできぬものである。善きことの思われせらるるも、悪しきことの思われせらるるも宿業である我らである。その宿業の悲しみに於いて苦樂の報いも受けねばならない。それは「随処に従となる」ものともいうべきであらうか。その凡夫の身に不思議にも柔軟心があらわれる。それはまことに念仏のところに感知

せられる如来の光明に依ることである。

ここに現生における「心光常護の益」というものがある。「撰取の心光は常に照護したまふ」とは迷い陥るところを覚へと護念せられることであらう。それは「煩惱を断ぜずして涅槃を得る」よろこびを与える光である。苦樂に迷いつつある身に、それを解脱する力を与え、善悪に執らえられつつあるところに無碍のところを得しむる光である。これに依りて凡夫は凡夫のままにして聖賢とその徳を同じうせしめられることとなるのである。

したがって仏弟子ということも、聖道においてのものとおのずから感覚を異にするものであろう。真宗では師資相伝とか面授口訣とかいうことは考えられていない。それは如来の本願と苦惱の群生との間に行なわれるものであるからである。しかればその真宗において師弟といつても、それは如来と衆生とを代表するものに他ならぬであらう。教うる師はただ如来の本願を念じ、聞く信者は群生のところを失わない。そこに真宗の歴史的伝統があるのである。それは師資相伝ということよりも、深い人間的自覚の底流となつているものである。

五

ここで再び柔軟の性格を考えてみたい。それは柔弱と全く異なるものである。仏教の声明(音声樂)に依れば音声には強・弱あり、剛・柔がある。しかるに剛なるものは必ずしも強ではなく、かえつて弱と相応し、柔なるものは必ずしも弱ではなく、かえつて強と相応するのである。しかして音声として最も理想的なるものは、その柔にして強なるものであるというのである。これによりて思うに柔軟性というものは、その柔にして強なるものであろう。仏の説法は八音であると言われている。その八音

を代表するものも柔軟の声であるにちがいない。その八音は衆生を慈悲して涅槃へと導く響きを持つものである。こうして耳に聞える仏の音声は柔軟であるように眼に見られる仏の光明も柔軟であるのである。『観無量寿経』によれば観音の宝手からあらわれる光は「柔軟にして普く一切を照らし、衆生を接引」せられるということである。しかれば攝取不捨ということも光明の柔軟性に依りて行なわれるのである。『観経』にはまた柔軟性を如意宝珠と思ひ合わせている。その如意とは、同じ経に「阿弥陀仏は神通如意」と説かれたことを想起せしめる。しかしてその如意とは衆生の意のごとくであつて、それを如来の意のごとくならしめることであると解釈されているものである。しかればその如意こそは衆生を接引する攝取力であり、その成し遂げられることは光明の柔軟性によるものであらねばならない。

しかれば身心柔軟というも、身心ともに順応性を持つということに他ならぬのであろう。人身の健康状態とは、順応性を持つことである。そのことは医学において説かれているようである。老人の哀れさは、身は硬化して寒暑に順応することができず、心は固陋になりて善き思想を受容し得ないことである。青年もただ剛直であることをのみ求むれば、かえつて内部に脆弱さを生ぜぬとはかぎらない。真の力強さはつねに柔軟性を有つものであることは周知の事実である。しかれば身心柔軟ということも、人間の理想的状態として手近に求められているものに他ならぬのであろう。しかも現実にはそれは何人にも満足されてはいない。ここに触光柔軟の願意を思う。まことに卑近にて高遠なる仏法である。

まるつと分かる！

仏教の日本史

『歴史道』Vol.135

日本の仏教1500年史

大陸から伝来、国づくりの礎となり、
貴族や支配者層から庶民にまでひろがっ
ていった！

異国の神、蕃神の信仰として受け入れられた
仏教は、有名・無名の僧たちの探求・研鑽、日
本古来の信仰や民俗との関わりによってさま
ざまな変容を遂げてきた。それは日本人のた
めの仏教を見出すための終わりのない努力で
あつた。

異国の神としての受容から
日本的仏教の確立まで

日本への仏教の伝来は欽明天皇の御代だと
される。西暦でいうと538年もしくは552
年とされる。しかし、これは百済の聖明王から
天皇に仏像や経典が献上されたという、外交
上の公式な記録であり、これ以前にも渡来人
などによる非公式の紹介はなされたいたも
のと思われる。実際、522年に来日した司馬
達等が草堂を建てて仏像を礼拝したとする史
料もある。さらには『梁書』(692年に成立し

た中国の史書)には、458年に中央アジアか
ら扶桑に僧が渡つて仏教を伝えたという記録
もある。ここにいう扶桑が日本のこととする
と、日本の仏教は1600年近い歴史があるこ
とになる。

『梁書』の説をとる研究者はいないが、四世紀後
半には高句麗や百済に仏教が伝わっていたことを
考えると、必ずしも荒唐無稽な説とはいえない。

仏教が伝わったのが何年だったにしろ、その教理
が正しく理解されるようになるには時間が
必要であつた。むしろ当時の朝廷や蘇我氏などの
主要豪族が仏教に対して期待したのは、建築・鑄
造・窯業といった仏教に伴つて伝えられる技術の導
入であつた。仏教を通じて最先端の知識・技術を
採り入れ、日本の国家レベルを引き上げようとし
たのだ。

そうした事業の象徴が聖徳太子といえる。近年、
その存在が疑問視されているが、その名のもとに行
なわれたとされる四天王寺・法隆寺などの造寺、
「十七条憲法」に代表される政治改革、外交、経典
研究は、後世に大きな影響を与えている。その意味
では聖徳太子は実在したといえる。

仏教による国家レベル上昇の試みは、奈良時代に
も続けられた。鑑真の請来もその一環であつた。と
いうのも、鑑真が来日するまで、日本には国際基準
に則つた僧はほとんどいなかったからだ。

そして、『華嚴経』、『梵網経』に説かれる盧舎那仏
を衷心とした宇宙観を寺院のネットワークとして
知情に作り出した、聖武天皇による東大寺大仏・
国分寺プロジェクトは、日本の至つたレゾルを国際
社会に示すためのものでもあつた。

しかし、奈良時代の仏教はまだ形式的なもの

でしかなかった。南都六宗の成立により教理の研究も深まったが、宗教としては十全に機能していなかった。

こうした状況に大きな変化をもたらしたのが、最澄と空海であった。ともに唐に渡って学んでいるが、それをそのまま日本に移植したわけではない。最澄は『法華経』を根本聖典とする天台宗を根幹に、戒律・禅・密教を加えた総合仏教の構築を目指した。空海は純粋な密教を独自に発展させるとともに、華嚴宗などの既成宗派の密教化を図った。

これらによって日本の仏教は、救済をもたらす宗教の顔をもつようになったのである。

庶民が主役の信仰となるも
幕府の統制により活力を失う

救済の宗教としての仏教は、末法思想の流行により重要性を増していった。末法とは仏教の歴史観の一つで、釈迦の死から時間が経つと仏教が形骸化して、悟りを得る者がいなくなることをいう。この時代になると天災・人災が頻発するとされ、現世も地獄のようになると恐れられた。

貴族たちは末法の世でも救いをもたらす力をもつ阿弥陀如来や観音菩薩、地藏菩薩といった慈悲の仏や、災厄を打ち払う密教の仏にすがった。そうした中で国家や社会の繁栄より、個々人の今の平穏と来世の安穩(極楽往生)が重視されるようになっていった。

その一方で、社会の下層で見捨てられたような生活をしてきた庶民にも、仏教を広めようとする僧たちも現れた。そのはしりが平安中期の空也(唱えた念仏が阿弥陀如来の姿になったことで知られる)であるが、その後、聖と呼ばれる無名の下級僧たちに受け継がれ、鎌倉新仏教の誕生へとつながった。

なお、空也や聖は施療や食事の配給に加えて葬送も、下層庶民を仏教に導く手段として用いた。うち捨てられていた死体を供養することを通して、念仏往生の信仰などを広めたのだ。

鎌倉時代になると、救済の意味を深く追求して、浄土信仰や『法華経』信仰、禅といった特定の信仰を純化する者たちが出てきた。これが鎌倉新仏教の誕生であるが、社会的な勢力となっていくのは室町時代以降のことだ。ただし、臨済宗だけは武装政権と結びつつ、天台宗・真言宗と並ぶ権門宗派と並ぶ権門宗派となった。

しかし、応仁の乱より100年以上にわたる続く戦国時代は、権門宗派の後ろ盾となっていた幕府や守護の没落を招き、代わって地方の武家勢力や町民の信仰を集めた浄土宗・浄土真宗・時宗・日蓮宗・曹洞宗といった五山寺院に含まれない臨済宗の宗派の勢力拡大をもたらした。中でも浄土真宗と日蓮宗は一揆により自治権を獲得し、戦国時代に伍するほどになった。

このように宗派や寺院が強い政治力・軍事力

をもつことは政権の不安定化に結びつくと考えた江戸幕府は、『寺院法度』を定めて仏教をその管理下におき、布教などの勢力拡大に結びつく活動を禁じた。また、寺檀(檀家)制度によって各地の寺院を幕府行政の出先機関としての役割を担わせたのであった。

宗派の活動が制限される一方、平和を享受した庶民は霊場寺院などへの参詣にさかんに出るようになった。

しかし近代以降、仏教は危機の時代に入った。神仏分離・廃仏毀釈のダメージだけではなく、明治の土地令と戦後の農地改革により境内地以外の寺領を失い、経済的基盤が大きく揺らぐことになったからだ。

庶民にも支持された鎌倉新仏教の誕生

平安時代末から鎌倉時代になると新たな宗派が続々と誕生し、「鎌倉新仏教」とよばれるそれまでの宗派は貴族など特権階級の庇護によって勢力を拡大していたが、鎌倉新仏教は武士や庶民の間に広がっていった。

旧来の権門宗派が衰退し鎌倉新仏教などが勢力を伸長・寺内町

戦国時代、仏教界にも下克上が起きる。幕府や守護の没落とともに権門宗派の真言・天台寺院が衰退。一方で地方の国衆や、庶民が信奉する鎌倉新仏教などが勢力を拡大していった。中世後期、浄土真宗の寺院を中心に形成された自治集落・寺内町。周囲に土塁や濠を巡らし、他宗派の襲撃や領主の収奪に備えた。

稱讚寺一〇月行事予定

稱讚寺 報恩講のご案内

編集後記（愚案）

日時 十二月二十二日(日)
日程

- 一二：三〇 お齋
- 一三：〇〇 法要
- 一三：五〇 休憩
- 一四：〇〇 法話(住職予定)
- 一五：〇〇 茶話会
- 一六：〇〇 終了

※十二月の寺報『稱讚』にて、あらためてご案内申し上げます。
年末のお忙しい時ではありますが、何卒、ご予定頂きますよう宜しくお願い申し上げます。



同じ様なお言葉として「心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」「教行信証」があります。後の御文は、阿弥陀さまが主語になろうかと思えます。前の御文は、ご信心を頂いた親鸞聖人のおこころが覗かれると思います。

現代の私たちは「心情」と言って「心」と「情」を同じ私自身の「こころ」を表わしていますが、親鸞聖人は、「心」と「情」を分けて表現しておられると思います。「心」は阿弥陀さまよりいただいた「ご信心」のことであり、決して、私のものではありません。その心は、「弘誓の仏地」に揺るぎなく樹っているのです。一方、私のこころの「情」は、「難思の法海に流す」のです。

「情」とは「ものをあわれみ、かなしみ、育む」うえでは、素晴らしいものであります。が、「欲も多くいかり、はらだち、そねみ、ねたむ」こころ多くひまなく、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず「なものです」。「情」とは自力のこころであり、「わがこころを大切に」「わがこころを信じ」「わがこころをたのむ」ことでもあります。

感受した「こころ」の流れが輪廻であれば、そのこころを流す場所があれば、輪廻することはなくなるのでしよう。その場所が「難思の法海」だと言われておられるのではないでしようか。

この世にはたらいっているにも拘わらず、私たちに気づくことのできない阿弥陀さまの大きな慈悲のおこころを聞き続けていくことが、「情を難思の法海に流す」ということではないでしようか。

そこに「業・宿業」「自業自得」の束縛から解放されていくことになっていくのではないでしようか。

11日(月)～16日(土)
築地本願寺報恩講
どうぞ、お参りください。

16日(土)午後2時 のんのん法話会
申し訳ありません。住職は不在ですが、お正信偈をおつとめして、語らってください。

おき へんげん ほろ
あらず せかい ほろ
争いは世界を滅ぼす
驕りは人間を滅ぼす

二〇二四年「心のともしび」十一月カレンダーより